

松岡克尚『ソーシャルワークにおけるネットワーク概念とネットワーク・アプローチ』関西学院大学出版会、2016年。

第2章 個別ネットワーク (1) サービス利用者のネットワーク

【目次】

- 第1節 ソーシャルサポート・ネットワークの定義
- 第2節 ソーシャルサポート・ネットワーク概念を巡る議論
- 第3節 ソーシャルサポート・ネットワーク概念の起源と発展過程
- 第4節 問題理解の視点と介入方法
- 第5節 残された課題

【要約】

第1節 ソーシャルサポート・ネットワークの定義

・「相互に連結し合った人々の関係の総体であり、永続的な滋養環境 (nurturance) のパターンを提供したり、日常生活に生じる出来事に対処していく努力をそれに見合った形で促進していく役割を果たす」(Garbarino 1983) (57)

・相互依存関係…「…資源調達、ないし資源を交換しあう関係全体とそこから得られる有益物(資源)を指して、私たちはソーシャルサポートネットワークと呼んでいる」(58)

→「今日のソーシャルワーク実践にとって欠かせない重要概念の一つ」(57)

≡サポート・システム、ソーシャルサポート・システム、資源システム

・2つの概念

①社会ネットワーク：その人が取り結んだ対人関係の全体

②ソーシャルサポート：それらの関係を媒介にしてやり取りされる有益物(資源)

→この二つの基礎概念は、「いくら混同されようとも概念的には両者は明らかに別のもの」であるが、「徐々に両者を包摂する立場の方が支持される趨勢」(59)

・「社会関係」(social relation or social relationship) = T. アントヌッチら

①老年科学

—社会参加の度合が死亡率に影響を与えている (Sugisawa 1994)

—社会関係のなかでも友人ネットワークのみが直接効果を主観的幸福感に及ぼしている。友人サポートのほうは関連性を見出せなかった (古谷野ほか 1995a)

②社会福祉

—構造としての社会ネットワークと、機能としてのソーシャルサポートを包摂した

概念であり、それによって「ケアを含めた多様な支援をとらえ」ることが可能（山口ほか 2012）

—ネットワークサイズが大きいほど、個人的活動やボランティア活動が促進される。

同じ関係は参加への誘いと個人的・ボランティア活動との間にも見いだせた（岡本 2012）

→社会関係概念はソーシャルサポート・ネットワークと比較すると「それほど『市民権』を得ているとはいえない」（61）

・インフォーマル性

—ソーシャルサポート・ネットワークは「概ねインフォーマル性をその特徴としている」（61）

→フォーマルな支援とインフォーマルなサポートは、いずれも必要不可欠なので、「福祉ニーズを充足する役割のすべてをソーシャルサポート・ネットワークに委ねてしまうような姿勢（安上がり福祉論）」は大きな誤り（62）

→「小松源助が述べるように、フォーマルなサービス供給システムと意図的かつ有機的に結合させ、両者の連携を促進することによってサービス利用者のニーズ充足に資するようにソーシャルワーク実践を展開していく必要がある（小松 1986）」（62）

第2節 ソーシャルサポート・ネットワーク概念を巡る議論

1 自然発生的か、人工的か

①人工的（牧里 1993）

—社会福祉領域のネットワークを「マイクロ」「メゾ」「マクロ」の3種類に分け、「個別的な、個人を基盤とした」マイクロ・ネットワークのうち、「自然発生的に形成されたもの」ではない「意図的・意識的・職業的に形成されたもの」がソーシャルサポート・ネットワークと呼ばれることが多い、としている。

②自然発生的

—Natural Helping Networks (Pancoast & Collins 1987)

→「人工的・組織化説の場合は、『一方的に支援を受ける存在』としてのサービス利用者のイメージが、また自然発生説には『より積極的・能動的な』サービス利用者像が、それぞれ含意されているようで、…非常に興味深い（古谷野 1991）」（66）

2 サポートタイプか、否か

①サポートタイプ

—Walker 1997、Antonucci 1987

②サポートタイプでない（場合がある）

—『プラスのサポート』が提供されることもあれば、『マイナスのサポート』ないし『否定的サポート』でもいべきものが発生することもあり得る」（67）（Rook 1984: 寡婦の精神的健康に対する影響）

- 「ソーシャルサポート・ネットワークからの働きかけ（例えば、非行集団など）がかえってネットワーク外の人間からみれば『問題』としか思えない行動（例えば、非行など）を促進してしまったり、維持されてしまったりする可能性も指摘されている」（67）
（Alexander & Duff 1988: アルコール消費）
- 「ソーシャルサポート・ネットワークからサポートが提供されても、それが問題解決に的はずれであったり（非効果的）、やりすぎであったり（過剰）、本人の意思に反したものであったりすれば、負担と不愉快を与えるだけに終わる。…つまりは、サポートのつもりでも結果的に有害な結果を招くようなものが想定できるのである」（68）
（Antonucci 1990: 有害な影響を及ぼし得るネットワークの 4 種類の性格=①非効果的な援助、過剰な援助、望まない交流および不愉快な交流）

3 インフォーマルのみか、フォーマルも含むのか

①フォーマルも含む

- 「対人サービス諸専門的職業従事者のチームワーク（フォーマル・ネットワーク）およびボランティア・友人・近隣・近親者などのインフォーマルなネットワーク、それらを総合したソーシャルサポート・ネットワークが重視されるようになった」（山手 1996）。
- “両者のどちらかのみでは今日の生活問題に対応することは難しい”（川島 2011）
- 「コンボイ・モデル」（Kahn & Antonucci）

②インフォーマルのみ

- 「個人が持つ『専門的ではない、インフォーマルな援助者、家族、友人、隣人、地区の世話人などの素人の援助者』（小松 1988: 19）との関係の総体としてソーシャルサポート・ネットワークを定義づけている」（69-70）
- 概念的にはインフォーマルに限定する考え方が優勢。
- 「その背景としては、フォーマル・サービスのみでは広汎な人間のニーズのすべてを充足することは難しいという認識が強まったことに加え、どうしても官僚的になりがちなフォーマル・サービスに対する反省があることが無関係ではないだろう」（70）
- 「…実践の観点からいえば、ソーシャルサポート・ネットワークにはインフォーマル性が前提になっていることを認識しつつも、実践範囲をそれだけ限定してしまうことは有益とはいえず、むしろ有害でさえある」（70）

第3節 ソーシャルサポート・ネットワーク概念の起源と発展過程

1 源流としてのソーシャルサポート・ネットワーク概念の起源と発展過程

- ・ソーシャルワーク誕生以前からの重要な財産（ex. COS）（Maguire 1980）
- ・社会学の古典（ex. E. デュルケム：社会的紐帯が弱いほど自殺率が高い）
- ・社会ネットワーク
 - J. バーンズ（1954）：ノルウェーの島民生活の研究。階級でも集団でもないが所属意識

がある人々の絆（＝社会ネットワーク）の発見

→ J. ミッチェル（1969）：「ある特定の個人間の特定のつながり」

- ・心理学（S. フロイト）、愛着理論（J. ボウルビィ）

2 資源としてのネットワーク論

- ・大谷信介（1995）：「資源としてのネットワーク」と位置付けた研究の潮流

→ M. グラノヴェッター（1973）：弱い紐帯の強さ

- ・B. ウェルマンら（1979）：「コミュニティ・クエスチョン」

→ 「依然としてコミュニティ＝社会ネットワークが存続し、そのあり方が個人の生活に影響を与えているという知見は、バークレイ報告多数派報告の主張に重なる部分が多い」（77）

3 ソーシャルワークにおける潮流

- ・ストレス研究（Cassel 1974）：ソーシャルサポートのストレス緩和・クッション機能

- ・サポートシステム論（Caplan 1974）

「日常生活のなかで直面するさまざまなニード、状況的な危機および発達の危機に対処して個人の安寧を達成するためにインフォーマルなサポートシステムを活用し、その力を向上させ、あるいは新たに構築し、これらと連携を取って行く役割を果たすべき」（78）

→ 「ここにソーシャルサポート・ネットワーク論の基礎的な形成が果たされたことを認めることができる」（78）

- ・コンボイ・モデル（カーンとアントヌッチ）

「愛情」「評価」「補助」を提供する人々の集まり（護送船団）。コンボイの構成内容はライフコースの変遷にともなって変化。本人のもつ「役割」に関連して変化する部分と、変化しない部分に分けてとらえる。

- ・バークレイ多数派報告（1982）

コミュニティに存在している各種のインフォーマルなサポート源を活用し、その機能を高め、新たに開発、創出していくことを「社会的ケア計画」と呼び、それらをカウンセリングと並ぶソーシャルワークの重要な要素であるとした。

→ 「最終的に、ソーシャルサポート・ネットワークの考え方をソーシャルワークに導入していくことが避けられないことを強くアピールし、ソーシャルワーカーの中でも大きな論争を呼んだ」（79）

4 ソーシャルサポート・ネットワーク論導入の背景

- ・小島美都子（1987）

“地域での社会関係を再構築する方法技術として受け入れられるようになった”

- ・K. エル（1984）：

“ソーシャルサポート・ネットワークの考え方はソーシャルワークにおいては伝統的な主題と同一のものであることを指摘し、個人とその環境である社会ネットワークとの間で

適切な一致 (goodness-of-fit) が得られるようにすることは、専門的な支援を提供することに加えてソーシャルワークの日常活動のゴールである”

・横山 (1995)

「ソーシャルサポート・ネットワークが導入された背景として『個人を取り巻く環境よりも個人の人格や心理的側面への働きかけに傾斜しすぎたことの反省』があったことを指摘」(81)

→「明らかに、ソーシャルサポート・ネットワークの考え方は、環境的側面を重視したシステム・アプローチやエコロジカル・アプローチとその出発点を共有している」(81)

→「専門職であるソーシャルワーカーが法制度に即してクライアントを支援するという伝統的な援助枠組の支援だけでは、クライアントの QOL 向上と維持にとっては限界があるという認識が広まったことも一つの要因になっている」(81)

第4節 問題理解の視点と介入方法

・利用者ニーズの充足には“環境に存在する諸資源 (environmental resources) が必要”

“諸資源の一つとしてソーシャルサポート・ネットワークを位置づけている”(Hepworth & Larson 1993) = 「資源としてのネットワーク」論に連なっている (83)

→「ソーシャルワークでは、…サービス利用者のもつソーシャルサポート・ネットワークを把握することは、アセスメント、介入戦略の立案および事後評価の各段階において必須の作業になってきている」(83-84)

・測定ツール

—エコマップ (Hartman 1978)

—社会ネットワーク・マップ (Tracy & Whittaker 1990; Tracy & Abell 1994)

・介入技法

—R. シリング (1987)

①新しいソーシャルサポート・ネットワークを作る

②既に存在しているソーシャルサポート・ネットワークの強化

③サービス利用者が自らのソーシャルサポート・ネットワークを強化できることを意図したソーシャルスキル・トレーニング

・コンティンゲンシー理論

「ソーシャルサポート・ネットワークは決して万能なのではなく、その置かれている状況に応じて適切な介入方法がとられなければならない」(86)

—G. オースランダーと H. リトウィン「ネットワーク介入」(1987)

・「サービス利用者が現に所有しているソーシャルサポート・ネットワークの機能に影響(強化、変容、方向づけ)を与えるような、あるいは以前には存在していなかったソーシャルサポート・ネットワークを新たに創出したり、それへの接近可能性を改善したりするような専門職による計画的実践活動」(86-87)

- ・「有用性 availability」と「問題適格性 amenability」の2軸を交差してモデル化
- 「『マイナスのサポート』の存在をどのように介入戦略に反映させていくのか」(88)
- 「(友人や近隣の協力において) サービス利用者の秘密保持を如何にして可能にしていくのか」(横山 1992) (88)

第5節 残された課題

①ジェンダー・バイアスがかかりやすい(ケアにおける女性役割を強化してしまう危険性)

②概念的、理論的な面での洗練化

“ソーシャルサポート・ネットワークと「安寧」(well-being)との関係が依然として不明瞭” “この概念から「ソーシャルワーク実践に対するある種のロマンティックなイデオロギー」が生じている”(Specht 1988=1991)

③フォーマル・セクターとの連携

- ・「フォーマルなサービス提供者との間に有機的な結合なくしては、ソーシャルサポート・ネットワークを念頭に置いた実践は十分な効果を達成し得ない」(91)

—ゴッドリーブら

インフォーマルなサポートが相互扶助を基本原理にしているのに対して、フォーマルな援助は明瞭な手続きとルールを基礎にしており、基本原理がことなっているため、

“インフォーマル・フォーマルの両セクター間で良好な連携関係を築き、それを特定個人への具体的な援助戦略に活用していくことには難しい側面が予測される”(Gottlieb 1983)

—M. セルチュアら

“インフォーマルなサポートと専門職との連携の必要性が強調されているにもかかわらず、その具体的な方法についてのガイダンスすらない”(Seltzer et al. 1987)

—H. リトウィンら

“9か国の比較調査では、高齢者を対象としたインフォーマル・フォーマル間の連携が存在して効果を上げているというような明白なデータを得られなかった”(Litwin 1996)

- 「そこで、ソーシャルサポート・ネットワークをフォーマルなサポート源と直接的に結合させるようなアプローチではなく、両者を総体的に別個の存在としてその独立性を尊重しつつ、ソーシャルワーカーを媒介者とした間接的な結合が望ましいとも思える」(92)

④ワーカーによる操作的性質

「ソーシャルワークがソーシャルサポート・ネットワークを介入の対象と見なす以上は、たとえ概念的にそれをインフォーマルなものに限定したとしても、ネットワークはソーシャルワーカーによって介入操作される対象、というニュアンスを完全に払しょくすることは難しい」(93)

【ディスカッション】

※以下は要約作成者個人の意見ではなく、ディスカッションの結果です。

- ・「マイナスのサポート」(88)をどう整理するか。何をもってマイナスとするか。本人にとっての「有益」「有用」？ 援助職から見た「有益」「有用」は本人から見ると「余計なお世話」になる可能性がある。視点を本人目線におくか援助職目線におくかによって変わる。研究として言及する場合、どの立場から論じるのかを明確にした方が良い。本人にとって「有益」「有用」かつ「反社会的な」サポートをどう扱うか。
- ・研究者・専門職はなぜネットワークに飛びついたか。「家族」はネットワークか？ システムではないのか。非行少年が所属する集団は準拠集団ととらえられてきた。エコマップでは表せないものがあるのではないか？
- ・ネットワークは資源が提供される経路を確認する上では有益ではないか。新型コロナ対策としての貸付相談に結びつく経路を考えると、口コミによって相談に結びついているケースが非常に多い。集団・集合でみていた従来の目線では見えなかった手がかりがみえるのではないか。
- ・専門職による援助は点と線で介入するから、援助側にとってネットワークはありがたい有益な概念である。ただし、人間を理解するには不十分さを感じる。
- ・人は生活のための資源を自力で調達して生きている。ナチュラルなソーシャルサポート・ネットワークと市場から調達している。その資源調達のしくみが何かの形で目詰まりしたり、機能不全、不調を起こしたときに福祉ニーズが現れ、福祉の支援が登場する。
- ・これまで地域社会とか制度という集合的な概念の側から個人や生活、援助を考えてきたが、個別支援も地域支援も行為者からみると現実の営みは資源調達の経路いかんであることが多い。この視点から考えるとネットワークは有用である。
- ・構造から考えるか行為者から考えるか、という問いは合点がいく。パートの隙間理論などのようにネットワークは行為者の能動性、主体性を表現するから、ネットワーク研究はそこに引きつけられたのかもしれない。
- ・ネットワークがすべてを説明する、というのではなく、集合的な概念からつかめない部分において有用とはいえるのではないか。
- ・構造と行為は、社会学ではミクロ・マクロ・リンクとして論じられてきた経緯がある。
- ・貸付の相談現場では家族システムが通用しない相談者に多く出会う。とくに外国人や難民では、住まいの確保や食料の調達など知人ネットワークを活用して生きている人がたくさんいることに気づく。こうしたケースの場合、一人ひとりが貸付の情報源にアクセスしているというよりも、知人・友人に教えられて知るに至っている。複数の相談者が同じ人から情報を得ていることに気づくこともある。こうしたリーダー的な人・ハブになっている人に相談が混み合わない時間を伝えたり、協力を依頼することで相談環境を改善できるのではないか。

- ・外国人・難民に加え、そもそも社会全体が個人化するなかで「家族」からではとらえることができない人が増えている。既存の集団から理解することが難しく、ネットワークから理解すると良い人は増えている。
 - ・本人が埋め込まれた集団から理解する、というアプローチに加え、埋め込まれた集団からはがされている人へのアプローチが必要である。
 - ・インボランタリー（支援拒否）は資源ネットワークと遮断が起こっている状態。インボランタリーに至っているパーソナルネットワークの構造はどのようにとらえられるか。
 - ・きっかけとしては過去の受診体験や生活保護相談での失敗体験が影響している、などの理由がみられる。行政では不可になり、社協からだとなつながつたというケースや、本人が話を聞いてみても良いかないという人と同行すると入れる、など。これならいいかも、と思えるパスを見つける。
 - ・（本章で紹介されている）シリング（1987）が介入技法の3つ目にソーシャルスキル・トレーニングを挙げている点が興味深い。
 - ・「サービス利用者のネットワーク」をとらえる概念としてソーシャルサポート・ネットワークを中心におき、関連する諸概念との統合的な把握を試みている点は、ソーシャルサポート・ネットワークの理解を深める上で有用と思われる。
- ①ソーシャルサポートと社会ネットワークを統合した概念＝「社会関係」研究
 - ②「個人の人格や心理的側面への働きかけに傾斜しすぎたことの反省」（横山 1995）
＝システム・アプローチ、エコロジカル・アプローチとの出発点の共有
 - ③利用者ニーズの充足には“環境に存在する諸資源が必要＝「資源としてのネットワーク」論
- ・ソーシャルサポート・ネットワーク概念を巡る議論として、①自然発生的か、人工的か、②サポータティブか、否か、③インフォーマルのみか、フォーマルを含むのか、という3つの論点を示し検討を行っている点は示唆に富む。
 - ・間接的援助ないしコミュニティワークの対象となる環境（地域社会など）を問題とする場合、個人の生態をとらえて介入するソーシャルサポート・ネットワークの外側が問題となる。本章では、この部分に関する論述がなかった。